

氏名(本籍)	いしだ しんいち 石田 信一 (茨城県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第1786号
学位授与年月日	平成14年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ダルマチアにおける国民統合過程の研究
主査	筑波大学教授 Dr. phil. 和田 廣
副査	筑波大学教授 博士(文学) 明石 紀雄
副査	筑波大学助教授 D. L. 立川 孝一
副査	筑波大学助教授 博士(文学) 中野目 徹
副査	東京大学教授 柴 宣弘

論文の内容の要旨

本論文は、19世紀後半のダルマチアにおける国民統合の過程を、「近代主義論」に立脚して再構成することを目的とする。著者は、複数の民族が混在するダルマチアでは、民族共同体と国民の連続性よりも、政治・外交上の諸条件こそが国民統合を方向づけるとし、クロアチア国立文書館をはじめとする各地の文書館に収蔵されている、膨大な数の未刊行の公的・私的史料の精密な分析と解説により、上記の仮説を立証する。本論は、序章、1～6章および終章、地図(3葉)、参考資料(9点)及び参考文献目録からなっている。

序章では、クロアチア人、セルビア人及びイタリア人からなるダルマチアの政治指導者や知識人が、自らが所属すべき特定の「国民」をいかにして選択したかが問題提起される。ダルマチアという地域が、オーストリア＝ハンガリー二重君主国に帰属する、自立的な州であるとともに、三つの異なる政治的単位に分裂し、更に社会・経済的かつ文化的には都市部と農村部に分かれているという複雑な様相を呈しており、それがダルマチアにおける国民統合の過程を複雑にしたことを指摘する。そして著者は、先行研究が依拠してきた「歴史的連続論」よりも、「近代主義論」がより有効であると強調する。

第一章「先行条件の概念：19世紀前半のダルマチア」においては、ダルマチアの地理的位置と歴史的背景、その文化的背景、即ち二つの言語(イタリア語とスラヴ語)と二つの宗教(ローマ＝カトリックと東方正教)、都市部と農村部で際だった対象をみせる社会・経済的背景並びにクロアチア、セルビア及びイタリア諸地方の状況が概観される。著者は、これらの諸条件はその二重性の故に統合要因としてよりも、阻害要因として注目すべきであると指摘する。

第二章「1848年革命期のダルマチア」は、ダルマチアにおける民族的自立の意識がどのように具体化されたかを探る。即ち、ウィーンの三月革命を機に、オーストリア＝ハンガリー二重君主国内では諸民族の間に民族的自立の意識が具体化される。クロアチアとイタリアは、歴史的権利や民族的権利を主張し、ダルマチアの併合を要求した。そのためダルマチアは、クロアチアとの合併をとるか、或いはヴェネツィアとの合併に傾くかの選択に迫られた。だがダルマチアの支配者層は、自らの地位や既得権の喪失を恐れたため変革を望まず、他方、知識人層もオーストリアの立憲体制に期待を寄せたため、全体的な意識改革には至らなかった。その結果ダルマチアは、

もっとも無難な選択肢である現状維持、即ち従来通りの自治を選ぶこととなった。

第三章「自治派と民族派の形成過程：1860－1861年」は、オーストリアが立憲的改革期に入った1860年以後の時期を捉え、ダルマチアで最初の、二つの政治的党派が誕生する過程を分析している。クロアチアのナショナリズムの刺激を受けた支配者層と知識人は、自治派と民族派という二派を形成した。自治派は、現状維持の立場から、ダルマチアの自治的地位の保持を目指し、コミューンの圧倒的多数の支持を得ていた。親イタリア的な自治派がイタリア語とイタリア文化を擁護したのに対し、親スラヴ的な民族派は、クロアチアとの合併を目指し、スラヴ語の公用語化を唱えた。

第四章「自治派と民族派の国民統合イデオロギー」では、両派の社会構成と国民統合イデオロギーが分析される。自治派を構成するのは、都市部の官吏、地主、商業ブルジョワジー、高位聖職者などであるが、その自治派も、リベラルな立場に立つスプリット派閥と、より保守的な立場を取るザダル派閥に分かれていた。自治派は、全体として既存のダルマチア王国の枠内でイタリア文化を共有しつつ、特定の民族集団に依存しない、領域的な「ダルマチア国民」の形成を目指した（ダルマチア主義）。これに対して民族派は、複数の南スラヴ系の民族醜聞、即ちクロアチア人、セルビア人、モンテネグロ人及びボスニア人等が一つの国民を構成するという理念を掲げ、これにより新たな共同体の創出を試みたとする。民族派は、親スラヴ的な傾向を持つ人々の集団で、海運業者、下位聖職者及び農民などを支持基盤とした。

第五章「自治派のイデオロギー転換：ダルマチア主義からイタリア主義へ」では、1860年代前半にオーストリア政府が絶対主義的支配体制を復活させようとする政策を採ったため、自治派内部がオーストリア政府支持派とリベラル派に分裂する傾向を見せた。1866年のオーストリア・イタリア戦争の結果がその分裂傾向を一層促進し、リベラル派は民族派と合流した。一方、オーストリア政府支持派は、これまでのスラヴ系住民をダルマチア国民として統合するという立場を放棄し、将来的にイタリアとの合併をも視野に入れた少数派のイタリア人政党に変貌した。

第六章「民族派のイデオロギー転換：クロアチア主義とセルビア主義」では、1860年代後半から1870年代後半にかけての諸事件を通じて、民族派が二派に分裂した軌跡を後づける。まず民族派内の聖職者グループが、カトリック信仰の強化を図り、カトリック教徒をクロアチア人、正教徒をセルビア人と同一視し、更に住民の圧倒的多数を占める農民がそうした立場を支持した。次には国外におけるセルビア・ナショナリズムの影響下に、正教徒住民がセルビア人として組織された。第三には、オスマン帝国から解放されたボスニアをめぐって、多数派はボスニアをクロアチアへ併合することを支持し、少数派はセルビアへの併合を支持した。以上の契機により民族派は、事実上「クロアチア人」の国民的政党となるのに対し、少数派の「セルビア人」は民族派を離脱して、「セルビア民族党」を結成する。

終章で、著者はこれまでの議論を総括し、1860年代にかけて、ダルマチア住民の指導層が、政治・外交上の諸条件の著しい制約の下で複数の選択肢の中から現実的な選択を行ったこと、また取り得た選択肢自体も時代とともに変化していったことも明らかにされたとする。このことは、仮説として提示した国民統合過程における政治・外交上の諸条件の決定的役割を立証すると同時に国民という存在の選択性と可変性を確認するものと結論づけている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

国民形成（統合）に関する歴史学的研究は、先行研究では「歴史的連続論」が優位を占めていた。しかし著者は、「近代主義論」の立場に立ち、人種、言語、宗教よりも政治・外交的諸条件の下における指導者層の選択を重視している。このように研究の視座が明快であり、論文内容も終始一貫して「近代主義」の立場から書かれているため、その主張は合理的で、説得力のあるものとなっている。本論文は、ダルマチアの国民統合論において独

自の見解を提示した点で学界に多大の貢献をなしうると言える。

史料的には、オーストリアの帝国議会議事録から地方自治体の公文書、更には当時の新聞、雑誌や代表的政治家、知識人の日記や書簡に至るまで、様々なレベルの一次史料をきわめて豊富に使用している。1990年代における旧ユーゴスラヴィアの状況を考えるなら、困難な条件下で、これだけ広範な史料収集を行った熱意と努力、その丹念な分析は高く評価されるべきであり、またその研究の信頼性を高めている。

本論文の研究対象は、1848年から1880年代にかけてのダルマチアである。だが本論文は、中世の集合的記憶から現代の民族対立に至るまでの長期的展望を持ち、同時に地域的にもイタリアからトルコに至るまでの国際的な視野の広がりを持っている。従って、本論文は、日本やアジアをも含めたナショナリズムの国際的な比較研究にとっても大きな可能性を与えるものとなりうる。

今後の課題としては、著者は国民形成（統合）を促した力を「イデオロギー」と呼んでいるが、それがどのような文化的活動や意識（心性）によって形成されたかについては、かなり抑えた扱いをしている。合理的な説明を追求するあまり、政治過程の奥に潜む非合理的要素、例えば宗教的つながりや民族的優越主義などへの配慮がやや不足している感がある。政治過程の通時的な分析はきわめて明快であったが、言説（イデオロギー）の構造についての共時的な分析と解釈が今後の課題といえよう。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。